

2019年12月26日 上演⑭

第72回中部日本高等学校演劇大会

# 速報 立山14号

## 愛知淑徳高校

井関義久 作

愛知淑徳高校演劇部 潤色

### 「学校」

#### ○幕間討論

演出意図

大学入試の変化に合わせて教育がどうあるべきか観客自身に考えて欲しかった。

- Q. 動きや声はどのように合わせたのか。
- A. 音に合わせて声を出し、台詞のない動きの時は舞台袖でカウントし、合図を出すなどした。
- Q. メトロノームの音の意図と拍の速度の変化について
- A. 規律を表しており、最初遅く最後早くなったのは全体が統一へ収束していく様子を比喻した。
- Q. 統一された後、話し方が変化したのはどういう狙いか。
- A. 教科書を読むようにと指示した。小学校から統一を受けているなど感じて。
- ・就職などでは個性を求められるのに、学校では個性を伸ばせない。人目を気にして人に合わせる、とても日本らしい劇だと感じた。
  - ・メトロノームで人が統一されていくところに恐怖を感じた。

愛知淑徳高校の皆さん、

お疲れ様でした！



#### ○あらすじ

「しません、そんなこと。」  
ある学校でカンニングが起きた。それもクラスを超えた大規模なカンニングが。一人残らず、一字一句違いのない答案。先生たちは犯人捜しを始め、試験問題が盗まれ漏れていたのではないかと疑いを持ち始める。

「カンニングなんて、していません。」  
「先生に教わったとおりに勉強したら、ちゃんとなっちゃうんです。」

価値と統一。  
生徒たちはなぜ勉強をするのか。  
なぜ校則を守るのか。

ねえ、先生？

#### ○客席インタビュー

- ・昭和30年代の当時の雰囲気である閉塞感や緊迫感、恐怖が感じられた。
- ・個性が重んじられる中で統一しようという心がメトロノームの音で規律されていた。
- ・上手と下手で同じことを対照的に行っていたことにも恐怖。
- ・同じ作品を見たが昔と今では全然印象が違う。